

2019. 8. 29

畑 啓之

和辻哲郎は小学生の時に加古川市鶴林寺横の庄屋屋敷に住んだことがあった

和辻哲郎の生まれは姫路市仁豊野であることは知っていたが、加古川市に住んだことがあったとは知らなかった。小学校に通う都合から加古川の親戚宅（元庄屋宅）にお世話になったとのことである。

Google Map より 赤色四角が元庄屋屋敷



この事実を教えてくれたのが書籍「渡邊崋山と明石藩 わが家の歴史探訪 山野聖二著（平成5年）」の「第3章 和辻哲郎の太子堂のほとりの家」である。その冒頭部分を以下に貼付した。

また、この時の思い出を和辻は「自叙伝の試み 和辻哲郎著（昭和36年）」の中の「太子堂のほとり」で書き記している。太子堂は加古川市鶴林寺にあるお堂であり、和辻の時代にはこの鶴林寺の中に小学校があったとのことである。こちらも冒頭部分を以下に貼付した。

和辻哲郎（Wikipedia）

哲学者、倫理学者、文化史家、日本思想史家。『古寺巡礼』『風土』などの著作で知られ、その倫理学の体系は和辻倫理学と呼ばれる。日本倫理学会会員。

1889年 - 兵庫県神崎郡砥堀村仁豊野（現・姫路市仁豊野）にて誕生。

1906年 - 旧制姫路中学校（現・姫路西高校）卒業。

1909年 - 第一高等学校卒業。

1912年 - 東京帝国大学文科大学哲学科卒業、同大学院進学。

1960年 - 心筋梗塞により練馬区南町の自宅で死去。

現在の元庄屋屋敷



歴史の1頁を刻んだ建物ではあるが、時代の流れには抗しきれず、かなり痛みが進んでいる。この建物を見ることができるのは、ほんのいましばらくである。



井上政次郎遺像記念

第三章 和辻哲郎の太子堂のほとりの家

前章の『雨月物語』の件で、松浦寛子から送られて来た『ほっとかこがわ』第四号を見て、その一隅に、一加古川をもっと知るために―と題して、加古川に関連する小説の題と、作家の名前が紹介してあった。

「田山花袋の『続南船北馬』、宮本百合子の『播州平野』、和辻哲郎の随筆『太子堂のほとり』、……加古川はさまざまな作家の作品に姿を現している。」とあった。

私は『太子堂のほとり』の題を見て、これは、父元造が住む加古川北在家きたざいけの家のことが書かれている随筆だと直感した。それは、この家は以前に北在家村の庄屋をしていた井上家の家であって、元造が恩人としている井上潔よしよしが、小学生の頃に従兄弟の和辻龍太郎りょうたろう、哲郎兄弟と数年間住んだことがあることを、私は知っていたからである。今この家は、井上潔から元造に譲られ、ついで東京に住む兄山野俣の名義になっている。

私がそれを知っていたのは、井上潔が、昭和初年に世界一周をしたときに書いた本『雑記帳から』を読んでいたもので、それに共に住んだことが書かれていたから、知っていたのである。

龍太郎、哲郎兄弟の父瑞太郎（医者）には寿賀「うめ」、春次（京大耳鼻科創立）の兄弟がいて、寿賀が潔の母である。また、潔の妻は春次の娘の絢子である。従って、哲郎、絢子、潔はいずれからも従兄妹であった。龍太郎、哲郎兄弟が何故、叔母が嫁いだ井上政次郎のもとに身を寄せたかは、哲郎の『太子堂のほとり』で詳しく述べられている。それは、当時の学制は、四年の尋常小学校と、四年の高等小学校からなっていたが、仁豊野の和辻家の近在の高等小学校が通学に不便で、加古川の安田にある高等小学校への、北在家の井上家からの通学の方が容易であったからである。この三人は後で姫路中学校に入学をしているが、今度は潔は仁豊野の和辻家に寄宿して、そこから6kmを歩いて通っている。昔は随分遠い所まで歩いて通ったものだと感じる次第である。

井上潔は、一橋高商を出て鐘紡に入社し、津田社長のとときに同社のNo2になった人である。昭和初期に綿織物の日英通商摩擦があつて、そのとき業界代表の一人として、ロンドンでの英国との通商交渉の政府随員としてそれに参加している。当時は船旅で、行きはインド洋を、帰りは大西洋を米国経由で、太平洋を通過して世界一周をしている。その紀行文を本にしたのが『雑記帳から』であった。私はその家に、昭和二十年（明石中学三年・終戦の年）から結婚する昭和三十七年まで住んだが、その本は中学を卒業するまでに読んだ。今から四十五年程前のことである。この本は元造が潔から貰った本であるが、先日この文を書くために物置を探したが見つからなかった。

井上家から佐門に嫁いだ梅谷せきは、井上政次郎の姉であったので、その子の祖母でいと、潔とは従姉弟である。ていは、幼くして父佐門に死に別れ、その跡は姉の「たつえ」が養子の祥哉を迎えたこともあつてか、一時井上家の養女なっていた。ていは後に祥哉の養妹となつて梅谷家から山野元三郎に嫁いでいる。

『太子堂のほとり』の随筆があることを知る前に、姫路に和辻哲郎の記念館のようなものがあることは聞いていた。私はそのこと、姫路の図書館とを回ると『太子堂のほとり』の随筆が何の本に収められているのかと判ると考えた。元造は姫路中学の寄宿舎に五年間居たのでその地理に詳しいので尋ねると、男山にあるという。そのとき姫路城が姫山でその西側にあると教えてくれた。私も姫路の県立工業専門学校に三年間通つたが、戦後の焼け跡も残り、五十米道路も工事中の殺風景な時代であったので、姫路の地理は今一つ詳しくないのである。人に聞いたりして調べると、目的の記念館は、姫路文学資料館であることも判つてきた。平成五年の初めにJRとバスとでそこに行つたが、JRの新快速が西明石から姫路まで二十分と短時間に着き、バスの乗り継ぎもスムーズであつたので、国立病院のところまでバスを降りて、姫路城の裏側を東から西へ十五分くらい歩いて着いたら、早く着き過ぎて未だ開館をしていなかった。姫路城の裏手は、すっかり公園として整備され、その合間に美術館や、博物館、図書館などが新設されていた。ものの不自由な戦後の頃の姫路を知る身には、日本も豊かな国になったものだ、つくづく思う次第である。文学資料館に入って、まずパンフレットや、本などの資料で買っておいたらどうかと思われるものを探したら、『自叙傳の試み』と言う本があつたので、その中に『太子堂のほとり』の項があることも知らずにそれを買つた。資料館の中には姫路出身の文学者といわれる人の、個室的な記念室があつて、松岡五兄弟（柳田国男）らの部屋に続いて、和辻哲郎の記念室があつた。妻の照との結婚前後の手紙のやり取りや、夫妻の写真などが展示され、親族一同三十数人の大きな写真があつたのが印象に残っている。結婚間もないかなり若い頃のものであつたが、私は一目で哲郎夫妻が判るのではないが、若い井上潔、絢子夫妻がこの中に居たことは、直ぐに判つた。和辻哲郎年譜のパネルには明治三十二年（一九一九）十

太子堂のひとり

飼つたりする技術があるといふことさへ知らなかつた。が飼ふのでなく捕へるといふことになる、きりぎりすなどは熱心に追ひかけた。眞夏の草むらの中でギース、チョンと鳴いてゐるのを、隙を見て素早く捕へるのである。指に食ひつかれると相當に痛かつた。あの鳴き聲を思ひ起すと、季節の感じが湧き上つてくる。それよりも一層熱心に追ひかけたのは蟬である。捕へたのはくま蟬、油蟬、みんみん蟬位のもので、春蟬やひぐらしなどは決して捕まらなかつた。捕へ得たところでそれだけのことなのであるが、しかし捕へれば非常に嬉しかつた。特にくま蟬は形も最も大きいので、特別に嬉しかつた。この蟬が、黒光りのする胴體の上に、透明なはねをのせ、その胴體を猛烈に動かしてワッショ〜と激しく鳴くところは、何となく獅子のやうな感じであつたが、それをねらつてそうつと樹をのぼつて行く時の緊張感、今でもはつきりと思ひ起すことが出来る。この蟬は東京あたりにはゐないやうである。

秋の蟲は飼ふまでもなく野山に一杯に鳴いてゐて、物を覚える頃にすでに哀感をそよるものになつてゐたが、それと聯關して、七夕の頃の朝露の觸覺とか、蓮の葉や芋の葉に溜つてゐる露の玉の光とか、露にぬれた萩の花の色とかが思ひ出される。この種のものへの關心がどうして起つて來たのか、自分にもはつきりしないが、日本の歌や俳句に豊富に現はれてくる秋の感じは、さういふ歌や俳句に接する前に、村の子としてすでに十分に味はつてゐたやうに思はれる。

太子堂のひとり

山陽線の加古川驛の南方十四五町のとこに、鶴林寺といふ寺がある。その寺の、いかにも愛らしい顔をした聖觀音像が、この頃は東京の博物館にならべてあるので、知つてゐる人も多いかと思ふが、もとは推古佛のうちに數へられ、この頃は白鳳佛といはれてゐるこの銅像が示してゐるやうに、これは由緒の古い寺である。普通には刀田の太子堂と呼ばれてゐる。聖徳太子の創建といふ傳説をこの名で現はしてゐるのである。現在本堂のそばにある太子堂は、推古とか白鳳とかいふ古いものではないが、しかしそれでも様式の上から平安時代末期の建立と考へられてゐる。三間四面の小さなお堂であるが、三間三面の寶形造の前面に一間通りを庇をつけて屋根をふきおろしてゐる形が、いかにも優美である。それに比べるとそのそばの本堂は、七間六面の大きなお堂で、時代も大分さがり、室町時代初期の建築だらうといふことになつてゐる。もとの本堂がどんなものであつたかは一向解らないが、養老年間に七堂伽藍を建造した時には、境内二十四丁で三百の坊があつたといふことであるから、もとは相當に大きい寺であつたと思はれる。

現在、加古川から高砂へ通じてゐる輕便鐵道は、この寺の東側を通り、南側の門外に停車場を設けてゐる。この鐵道が敷設されたのは、わたくしの子供の頃よりは、大分後のことである。それまでの唯

一の交通路は、加古川から尾上の松を経て高砂へ行く街道で、それがこの寺の北門の前から、寺域の西側を迂回して、南門前へ出てゐる。寺の南東側にある村が安田、北西側にある村が北在家であるが、この「北」といふのは寺からの方向づけを意味してゐるかも知れない。その北在家の西のはづれ、寺の北門を出て二町ほど西へ行つたところに、植田といふ小字こむらがあつて、水田の中の小高い地所に、人家が四五軒立つてゐた。その一軒がわたくしの親戚の井上の家なのであつた。

明治の前半に小學教育が追々整つて来て、高等小學校を建てなくてはならなくなつた時、加古郡ではこの鶴林寺の境内をかりて、二棟ほどの校舎を建てたのであつた。こゝへ加古川、高砂、別府、その他加古郡の所々方々から、尋常小學校を卒へた子供たちが通つて來たのである。遠いところは一里半から二里位も歩かなくてはならなかつたであらう。

この事情はわたくしの村でも同じで、自分の郡の高等小學校へ通ふとなると、やはり一里位は歩かなくてはならなかつたのであるが、井上の家に寄宿すれば、僅か二三町のところの高等小學校へ通へる。さういふわけで、既にわたくしよりも六年前に、わたくしの兄がこの高等小學校に入學し、二年前にこゝを卒業したのである。でわたくしは、殆んど自働的にこの兄の歩いた道に従ひ、明治三十二年の四月からこの高等小學校へ入學するために、井上の家へ寄寓したのであつた。

わたくしはこの時に初めて一人だけで汽車に乗つて「旅」をした。わたくしの村の停車場で汽車につて姫路驛まで約十五分、こゝで何十分か待つて山陽線の上り列車にのりかへ、加古川驛まで三十分足らず、これを「旅」と呼ぶのは少し大げさ過ぎるが、しかし自分の村の内だけで動いてゐた子供にとつては、數へ年の十一歳になつてゐてさへも、村の外に出ることがそれほどに氣持を緊張させたのである。さうしてまたさういふ緊張がさほど滑稽でもなかつたことは、同じ車に乗り合はせた大人

たちが、子供の「一人旅」をいかにも珍らしさうに眺めて、頻りにほめてくれたことによつても解ると思ふ。

加古川の驛へついて迎へに出てゐてくれた従兄の潔の顔を見た時に、この緊張は解けたのであるが、その時に偶然逢つた年長の子のことが、どういふわけかわたくしの記憶にはつきりと残つてゐる。その子は従兄の學校友達で、或は一級位上であつたかと思ふが、停車場を出たところで偶然ぶつかつて、一寸立ち話をしてゐた。その時に、今わたくしの降りて來た列車が、煙を吐きながら停車場を離れて遠ざかつて行くのが見えた。その頃はまだボギー車といふ大きい客車の出來てゐない時分で、五十人乗の、横に扉のついた小さい客車が普通だつたので、一列車のつないでゐる客車の數は相當に多かつたのであるが、それを眼で追ひつゝその子は、「何や、大きな芋蟲見たいなものが這うて行くわ」と言つたのである。わたくしはこの言葉を異様に感じて、ふとその子の顔を見たのであるが、その子は冗談を言つてゐるとも見えない眞面目な顔をしてゐた。でわたくしはその瞬間に、もしかしたらこの子は汽車といふものを知らないのではないか、と思つたのである。わたくしの村で汽車の通り始めを経験したわたくしにとつては、汽車を知らない子といふものはさほど珍らしい存在ではなかつた。しかしわたくしの村などよりは開けてゐるこの加古川の町にさういふ子のゐるのは、甚だ理解しにくいことであつた。今日、山奥からでも出て來たのであらうか。それならばどうして従兄と相知つてゐるのであらうか。わたくしにはそれがひどく不思議に思へ、それにつれてその子の存在が妙に氣になつた。それでその子から少し離れたところまでくると、急いで従兄にそのわけをきいた。ところが従兄は、わたくしと一緒にその子の言葉を聞いてゐたにもかゝらず、一向興味のなささうな顔をして、「あいつはいつも冗談ばかり言ひよる」と言つただけであつた。つまりわたくしには、その子の冗談を冗談

として聞きわけける方が、まだなかつたのである。それはまたわたくしが、これまで自分の村で、この子のやうなタイプの子に接せず、この子のやうな冗談の言ひ方に慣れてゐなかつたことを示してゐる。加古川は小さな町ではあつたが、町となるともうそれだけ村とは違つてゐたのである。

その加古川の町は東西に長く南北はわりに短かつたので、停車場から南へ四五町行くと、南の町端れへ出た。そのあたりに粟津といふ村があつて大きい神社が往来添ひにあり、その町寄りの方に瓦を焼く家があつたが、そこまで出ると南方の一面の麥畑が見晴らされ、十町足らず先の北在家の村の家並が見えた。町からの道は、この村の方向へ七八町ほど直線的に進むのであるが、この麥畑の中の直線道路が、子供にとつては少し退屈であつた。それを歩き終へると、道は少しく南西の方へ方向を變へ、村の中へ入らずに西の外郭を廻つて鶴林寺の北門の前へ出ることになる。井上の家はこゝで往来から分れて更に西の方へ里道を一二町入つたところにあるのであるから、北在家の村からは一寸離れた恰好になつてゐる。わたくしは一年數箇月の間井上の家にゐたが、北在家の村の中へ入つたのはほんの一二度に過ぎないやうに思ふ。従つてわたくしの記憶にはつきりと残つてゐる北在家は、往来に面してゐる西の外郭と、更にその西にある小字の植田とだけである。その中でも特によく覚えてゐるのは、往来から分れて二軒目にあつた瓦を作る家である。こゝでは粘土をこねるところから、瓦の形をつくるところ、それを竈に入れ火をつけるところ、焼上りのところなど、瓦作りの作業のあらゆる段階を、あきずに眺めてゐたものである。

この瓦作りの家の西側を幅一間位の小川が流れてゐた。これは加古川から引いた灌漑用水の流れで、鶴林寺の西側を尾上の松の方へ流れてゐたのであるが、それにかゝつてゐる石橋を渡ると間もなく左の方に植田へ入つて行く道があつて、いくらか上りになつてゐた。従つて植田といふ小字は、周囲の田地よりは三四尺位高くなつてゐたやうに思ふ。この地勢が子供の眼にもはつきりと映つたのは、この年の夏豪雨の際に加古川の堤が切れてこのあたりが一面に水浸しとなつた時であつた。北の方は加古川の町まで、南の方は尾上の松林まで、まるで湖のやうに眺められたのであつたが、鶴林寺の境内や北在家の村は島のやうになつて残つて居り、そこから二町ほどの水を距て、植田もまた小島のやうに水から出てゐたのである。

井上の家はこの植田の四五軒の人家のうち、東北の端、即ち鶴林寺の北門に最も近いところにあつたが、しかしその家の入口へ出るためには、大分まはり道をしなくてはならなかつた。といふのは、この小字へ入る道は井上の家とその西側の家との間を南西に向つて進んでゐるので、井上の家の西側面を通り過ぎたところがちやうど小字の中央になり、そこから井上の家に沿つて東南へ折れ、小字の端まで行くと、そこが井上の家のちやうど南端になつて居り、そこに家の前の一寸した廣場や入口などがあつたのである。門はなかつたやうに思ふ。入口は精確には東南に向いて居り、その前の廣場の東南の方が菜園になつてゐて、そこからだら／＼と少し下りると、川一枚を距て、前に言つた小川が流れてゐた。

この井上の家はこの時から五六年後に改築したので、改築前の古い姿はだん／＼臙ろになつてしまつたが、母屋は藁葺で、東南に向いてゐた。その向つて左に入口があつたが、向つて右側には塀が突き出てゐて、そこに木戸口があつた。それを入ると臺所口があり、その前が中庭のやうになつてゐて、そこに噴貫井戸があつた。井戸と言つても地中へ掘り下げたものでなく、水が地表まで噴き出てゐるので、圓い井筒の中に一杯に溜つて、外へあふれ出る仕掛けになつてゐた。この中庭の東側には納屋が續き、鋤の手に折れて北側には土藏が二つほど列んでゐたやうに思ふ。

家の中の様子もはつきりとは思ひ出せないが、入口から入つたところは土間になつてゐて、それが臺所の土間と一続きであつたやうな気がする。しかし臺所との間には仕切りがあつて、それにぐゞり戸がついてゐたやうに思ふ。またその仕切りも板壁ではなく、細い縦棧を並べたもので、紅がらを塗つたのが黒ずんだ色になつてびか／＼光つてゐたやうに思ふ。しかしその土間と茶の間や座敷などの間がどういふ風になつてゐたかは、どうもはつきりしない。

茶の間は臺所の奥にあつて、北側の庭に面してゐた。茶の間の隣に座敷があつたやうに思ふが、そこへは滅多に入らなかつたので記憶に残らないのは無理もないとして、一年餘りの間毎日食事をした茶の間のことは、もう少し覚えてゐても好きさうなものであるが、案外にこれも記憶に残つてゐない。子供部屋は入口の左側にあつた。格子窓が東南に向いて開いてゐる六疊の部屋で、その上に中二階があり、薬屋根とは別に瓦葺の屋根が乗つてゐたやうに思ふ。わたくしはこの六疊の部屋で一年の間従兄の潔と机を並べてゐたわけであるが、その机がどういふ机であつたかと思ひ出すことは出来ない。僅かに覚えてゐるのは、その中二階にいろ／＼な書類や書物が積み重ねてあり、その中の面白さうなのを引き出して讀んだことであつた。その頃出てゐた帝國文庫も十數冊混つてゐたが、中に、西鶴全集、大岡政談、漂流奇談全集などのあつたことを覚えてゐる。これらは讀んだせいで覚えてゐるのであらう。ほかに八犬傳があつたかどうかははつきりしない。わたくしはこの翌年頃に八犬傳を讀んだが、その時の本は帝國文庫本ではなかつた。

井上の家にかういふ本があつたのは、叔父の政次郎がさういふものに興味を持つてゐたからだと思ふが、それについてこの叔父の面影がいろ／＼と思ひ出されてくる。

この叔父は毎晩白鹿を二本位づいかにも楽しさうに飲んでゐた。その白鹿は新酒が出来た頃に、四斗樽で灘の方から直接取り寄せるのであるが、その輸送には陸路でなく海路を選んだ。海路と言つても灘から高砂までは僅かな距離なのであるが、しかし船に積まれて波に揺られると、樽の中味は非常に味がよくなるのだといふことであつた。わたくしが井上の家へ移つたのは三月の末であつたから、その年の白鹿の樽が着いてからまだ間のない頃であつた。叔父はいかにも幸福さうに晩酌をやり、何かしら氣焔をあげてゐた。毎晩のことであるから随分いろ／＼な話を聞いた筈であるが、大抵のことは覚えてゐない。然るにたゞ一つ、はつきりと覚えてゐることがある。それは豊澤團平に關聯した人形淨瑠璃のこと、三味線音楽のことである。

豊澤團平は明治時代に歌舞伎芝居において市川團十郎のやつたやうな仕事を人形淨瑠璃でやつた人だといはれてゐる。明治維新の變革後に、滅亡の怖れのあつた人形淨瑠璃を、たゞに持ちこたへたのみならず、それに新しい生氣を吹き込んだのは、主として彼の力によつたのである。その團平が七十二歳で歿したのは明治三十一年の四月の初めであつたが、わたくしが井上の家へ移つたのはその翌年の同じ頃なのであるから、事によると一周忌の催しか何かで、叔父の關心を特に刺戟するやうなことがあつたのかも知れない。とにかく叔父は、人形淨瑠璃や三味線のことを何も知らないわたくしを捕へて、(その時従兄も勿論同席してゐた筈であるが、さうして従兄はこの種のことについてすでに幾度か聞かされてゐた筈であるが、その點については何も覚えてゐない)淨瑠璃や三味線音楽がいかによぐれた藝術であるかを諄々と説き聞かせてくれたのである。その時叔父が、三味線はたゞ三本の糸であるが、その三本の糸で實に多様な音を出すことが出来るといふ意味のことを言つたのを、どういふわけかわたくしは覚えてゐるが、それが三味線といふ樂器についてのことであつたか、或は團平の三